

令和8年度「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」事前登録ガイダンス

史学科の学生は、2年次前期に「史学基礎演習Ⅰ」、2年次後期に「史学基礎演習Ⅱ」を履修して、各コース、各分野・時代の研究方法の基礎を広く学んでいきます。

「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、希望優先方式による事前登録制をとっています。以下の方法により希望を受け付けますので、履修を希望する演習を申請してください。また、選考の参考にするため、現在関心を持っている研究について、参考文献を示した上で、具体的に400字以上600字以内で記入してください。

- ◆登録期間:令和7年12月20日(土)～令和8年1月17日(土)23:59(厳守)
- ◆登録方法:Microsoft Forms 登録画面にしたがって必要事項を入力
- ◆登録内容:①希望する演習4つ(第1希望から第4希望まで1つずつ)
②関心を持っている研究テーマについて参考文献を示したうえで400字以上～600字以内
- ◆結果発表:2月中旬(予定)

【登録画面上の注意事項】

- ✧ 上記「登録内容」の②は、「志望理由」の欄に現在関心を持っている研究について、参考文献を示した上で、具体的に400字以上～600字内で記入してください。
- ✧ 選考は、関心を持っている研究テーマをもとに行います。
- ✧ 登録期間内に登録を終えなければ、希望通りに履修できません。
(登録画面上の【送信】ボタンをクリックして登録を完了してください)
- ✧ 教務課には閉室日があります。問い合わせの際は確認してください。

日本史学コースの場合は、「史学基礎演習Ⅰ」と「史学基礎演習Ⅱ」で異なる時代の演習を選択することを強くおすすめします。例年、一部の授業に人気が集中します。2年生になると、史学専門講義、史料講読・外書講読など、履修可能な授業が増えます。基礎演習だけではありませんので、安心して自分自身の専門性を高め、知識を広げてください。

次年度の「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、次ページ以降に記載される授業が開講されます。授業内容をよく理解したうえで登録してください。

登録方法:Microsoft Forms

<https://forms.office.com/r/x5RkXxMn8t>

時間の設定あり

①【史学科】2026年度「史学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」登録フォーム



史学科履修ガイドンス

史学基礎演習 I

No.	コース・分野	担当教員	授業テーマ
I -1	日本史学・古代史	山崎雅穂	古代日本の社会と文化
I -2	日本史学・古代史	清武雄二	出土文字資料からみた古代日本の政治と文化
I -3	日本史学・中世史	平野明夫	中世後期の政治・社会と文化を考える
I -4	日本史学・中世史	杉山一弥	日本中世史研究の基礎をまなぶ
I -5	日本史学・近世史	榎本 博	江戸時代の史料とくずし字の学修
I -6	日本史学・近世史	早田旅人	江戸時代の史料とくずし字の学修
I -7	日本史学・近現代史	内山京子	明治期の日記と書簡から政治家の姿に迫る
I -8	日本史学・近現代史	吉田律人	名望家の日記から読み解く日本近代史
I -9	外国史学・東洋史	江川式部	前近代東アジアの歴史世界ー法律と制度ー
I -10	外国史学・東洋史	樋口秀実	広いアジアの歴史を学ぶ
I -11	外国史学・西洋史	新任教員	西洋史入門
I -12	考古学	中村耕作	発掘調査報告書から先史時代人の行動・思考に迫る
I -13	考古学	深澤太郎	考古資料論 I :編年論ー遺構・遺物の「年代」ー
I -14	地域文化と景観	赤松加寿江	ヴェネツィアの都市景観を読み取る:都市景観図 Vedute と紀行文と建築
I -15	地域文化と景観	橋村 修	歴史地理学と地域文化ー地理と民俗の接点からー

史学基礎演習Ⅱ

No.	コース・分野	担当教員	授業テーマ
II-1	日本史学・古代史	清武雄二	『延喜式』から読み解く古代の国家と社会
II-2	日本史学・古代史	佐藤長門	日本古代史入門
II-3	日本史学・中世史	高橋秀樹	古記録入門
II-4	日本史学・中世史	矢部健太郎	室町・戦国・織豊期の古文書
II-5	日本史学・近世史	吉岡 孝	江戸時代の史料とくずし字の学修
II-6	日本史学・近世史	野本禎司	江戸時代の史料とくずし字の学修
II-7	日本史学・近現代史	柴田紳一	本学図書館の貴重書に学ぶ日本近代史
II-8	日本史学・近現代史	手塚雄太	日本近現代史の史料と論文を読む
II-9	外国史学・東洋史	江川式部	前近代東アジアの歴史世界—宗教と社会—
II-10	外国史学・東洋史	樋口秀実	広いアジアの歴史を学ぶ
II-11	外国史学・西洋史	新任教員	西洋近世・近代史基礎演習
II-12	外国史学・西洋史	神長英輔	西洋近現代史基礎演習
II-13	考古学	谷口康浩	入門 縄文時代の考古学
II-14	考古学	深澤太郎	考古資料論Ⅱ：機能論一人間が作つて使って捨てたモノー
II-15	地域文化と景観	赤松加寿江	トスカーナの都市景観と農村景観を読み取る：古地図と土地利用と建築
II-16	地域文化と景観	川名 祐	地図・絵図で読み解く『利根川図志』の世界

授業内容（史学基礎演習Ⅰ）

日本史学・古代史	山崎雅穂
<p>この演習では、日本古代史研究の方法を学ぶ。具体的には、平安時代の歴史、とくに平安京の相貌について一緒に考えながら、研究の方法について理解を深めていく。この時代には、古代の特徴をなす律令制にもとづくそれまでの政治・社会が大きく変容し、中世的な社会が準備されていく。天皇制の変質と摂関政治の展開、武士の登場、御靈信仰の発生などとともに、みやこの様相も変化する。ここでは、人びとの暮らしと社会、みやこの景観、都鄙間の交通などに着眼点をおいて、関連する研究を把握し、六国史や類聚三代格、貴族の日記、説話資料などの基本史料を読み解いていく。</p> <p>日本古代史を学びたい人には、「史料講読Ⅰ・Ⅱ」（山崎）、「史学専門講義（日本史）」（十川・清武）、「地域のなかの日本史Ⅰ」（中大輔）の履修をオススメする。</p>	

日本史学・古代史	清武雄二
<p>近年の日本古代史研究は、木簡や墨書き器といった出土文字資料の著しい増加により、文献史料のみでは明らかにし得なかった多様で実態的な古代史像が解明されつつある。また、韓国の出土木簡の調査事例が数多く紹介されることにより、列島における文字文化の受容とその展開、発展過程の研究が飛躍的に進展している。一方、考古遺物であるこれら出土文字資料の取扱いは、既存の文献史料とは異なる史料批判の方法をも加味した検討が必要とされる。本演習前半では、出土文字資料を東アジアの時代性・地域性といった視角から把握し、文字文化・文書行政全体から体系的に位置づけて理解できるように、具体的な調査研究事例をなるべく数多く紹介する。授業後半では具体的な木簡を取り上げて、学生が主体となる報告を行うことで、出土文字資料そのものの属性や形態・機能を十分に認識した研究方法の実践的習得を目指していく。</p>	

日本史学・中世史	平野明夫
<p>室町・戦国・織豊期の日記や古文書等を読み解きながら、史料読解の方法を身につけ、史料から何が明らかになるのかを考え、史料を基に中世社会を洞察することを学んで欲しい。そのためには、史料読解の基礎を備えられるよう、史料を読むことを行う。</p>	

日本史学・中世史	杉山一弥
<p>日本中世（院政・鎌倉・南北朝・室町・戦国）における重要事項（政治、経済、法律、宗教、文化、合戦）を、一次史料の古文書・古記録から復元する技能を養う。</p> <p>あわせて日本中世史研究でもとめられる思考・理論・規範の基礎をまなぶ。</p>	

日本史学・近世史	榎本 博
江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して 150 年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特的の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読み解きも必要である。	

日本史学・近世史	早田旅人
江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して 150 年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特的の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読み解きも必要である。	

日本史学・近現代史	内山京子
<p>個人の行動記録である近現代の日記は、時空を超えて書き手の世界を追体験することの出来る、極めて有効な手段である。その一方で、日記は書き手の主観がそのまま反映された世界像でもあるため、適切に利用するためには知識と技術が必要である。</p> <p>この演習では、日記の語句・内容・背景について辞典や論文などで調べて発表し、音読することで、近現代の史料の基礎的な読み解き力と分析力を身につけることを目指す。具体的には、『木戸孝允日記』を中心的に使用し、関連する書簡もあわせて読み解く。語句を調べながら丁寧に読み進めることで、明治初期の政治家の問題意識について考えていきたい。全員で音読するため、報告者以外も予習は不可欠である。史料報告を通じて近現代史研究の基礎を学ぶとともに、3年生からの卒業論文の作成に必要な技術を身につけるため、積極的に取り組んで欲しい。</p>	

日本史学・近現代史	吉田律人
個人が記した日記は過去の事象を知る重要な手掛かりとなる。本演習では、名望家の日記を読み、分析することで、近現代の史料を読み解く基礎的な技術や知識を学ぶ。名望家とは、政治や経済、文化活動を先導した地域社会の有力者である。具体的には、神奈川県橘樹郡生見尾村（現・横浜市鶴見区）の名望家であった佐久間権蔵の日記（横浜開港資料館編・発行『佐久間権蔵日記』）を使用し、明治末期～大正初期の地域社会の変化を読み解いていく。受講生には、日記を読むとともに、関連した論文、文献を調査した結果を報告してもらう。なお、状況に応じてフィールドワークなども実施する。積極的な姿勢で授業に臨んでもらいたい。	

外国史学・東洋史	江川式部
本演習は、前近代の中国を中心とした東アジアの歴史研究を志す方を対象とし、中国史の史料及びそれに関連する概説・論文を読み、史実の読み解き方を学習していきます。まず各種の研究入門書を紹介・参照しながら、研究テーマの選定方法・先行研究のリストアップ・どのような史資料を用いるのか、どのように読み解くのかなど、歴史研究の基本的な方法について学びます。授業の前半では実際に研究論文や史料の読み解きを通じて、論文の目的、内容、明らかになったこと、残された課題、史料等について考察と知見とを深めていきます。またこれとあわせて各人個別に設定したテーマで研究をすすめ、授業後半で研究発表をしていただきます。今回は「前近代東アジアの法律と制度」を大テーマといたします。	

外国史学・東洋史	樋口秀実
この演習は、中国・朝鮮古代史を除いたアジア史の諸問題について勉強しようという学生を対象とします。授業内容としては、①論文講読、②研究報告、③レポート執筆の3つを行ないます。①は、アジア諸国・諸地域の歴史に関する学術論文を読みます。「東洋史」というと「中国史」を連想しがちですが、この演習では、日中朝三地域を中心とする「漢字文化圏」に属さない、アジアの「横文字文化圏」の歴史に関する論文も読みます。②は、アジアの王朝や国家に関する報告をしてもらいます。③は、論文分析や報告内容に関わるレポートを数回書いてもらいます。①～③の作業を通じて、テーマを設定する、調査・分析を行なう、結論を導きだすといった論文執筆のために必要となる技術を身につけてください。なお、この授業は、皆さんの報告を中心に進められ、教員である私は、皆さんのアドバイザーとして脇役に徹します。授業のなかでいちば大事すべき要素は、自分の感性にもとづき、自分の意見を自分の言葉で述べることです。うるさいくらいでかまわないので、積極的に授業に参加し、どんどん発言をしてください。	

外国史学・西洋史	新任教員
本演習は西洋史を深く学びたい2年生を対象とし、西洋史の基礎ならびに研究の基礎を習得することを目指す。具体的には、各自がテキスト『論点・西洋史学』(ミネルヴァ書房)から関心のある項目を選び、教員が指定した方法で発表を行う。その後、全員参加のディスカッションをする。なお、この基礎演習では外国語文献講読の訓練は行わないで、別途「外書講読Ⅰ・Ⅱ」を履修することを推奨する。	

考古学	中村耕作
國學院大學は全国各地の膨大な発掘調査報告書を所蔵しています。発掘調査報告書は遺構・遺物のカタログであるとともに、発掘現場における個々の遺構・遺物の位置関係・出土状況を記録した原典資料でもあり、その記録を読み解くことで過去の人々の行動・思考に迫ることが可能です。この演習では、縄文時代を中心とした先史時代（旧石器時代～弥生時代）の各テーマ（住まい・ムラ・食料・技術・生産・交易・葬送・祭祀など）を考える上で重要な発掘調査事例を取り上げ、その調査成果をまとめた発掘調査報告書や、その資料を用いた模範的な分析論文を読み解いていきたいと思います。具体的なテーマ・遺跡は受講者の関心に沿ったものを初回に相談して決定し、各回2名程度の発表をもとに、調査・記録の方法や分析の仕方について議論しながら進める予定です。	

考古学	深澤太郎
考古学研究の前提は、モノの時期的（いつの？）・空間的（どこの？）位置付けを理解することです。そこで当演習では、弥生時代以降の遺構・遺物を取り上げて、それらの編年について考えていきます。具体的には、①編年論に関する講義を行った上で、②典型的な論文を講読して考古学者の思考法を理解していきます。その上で、③受講者にテーマを与えて演習発表を行う手順で進めていく予定です。テーマは、弥生時代・古墳時代をメインに考えていますが、初回授業時にアンケートを実施しますので、受講者の関心によっては、古代・中世・近世の資料についても触れていく予定です。	

地域文化と景観	赤松 加寿江
本演習では近世ヴェネツィアを対象に様々な史料を用いて、都市景観を読み取る力を身につけます。ヴェネツィアは干潟に土地を作り、東方貿易を通じて中世に繁栄した水の都です。多数残されている16世紀の都市景観画 Veduta、地誌、紀行文、建築史料を用いて、当時の都市空間を復元的に理解し、景観的特質を分析するスキルを習得します。絵図だけでなく建築史料を活用することで、空間をより実証的に明らかにしていきます。先行研究からヴェネツィアの都市形成に関する知見を深めたのち、都市景観画で描かれた建物群について、開口部の装飾様式や、建築類型学という方法から建物の建設年代を推定する方法を学び、各自分担した範囲においてテーマを設定し、演習発表を行います。発表に際しては文献探索、レジュメ作成、口頭発表の準備などを行います。本演習を通してヨーロッパ都市の景観を読み取る方法を学び、「地域文化と景観コース」の学修と研究に必要なスキルを身につけます。	

地域文化と景観	橋村 修
本演習は歴史地理学と民俗学の交差領域の研究方法を学ぶことを目的とする。受講者には、下記のような資料の分析と関係論文の紹介が課せられる。 本演習で対象とする資料は、生業（農山漁村）、生活文化（衣食住や信仰）に関わるもので、地形図や絵図（漁場図）、古文書（相論、資源、技術、隨筆、世相等）、民俗語彙・伝説関係資料、民俗誌、景観写真などが挙げられる。演習報告では歴史地理学・民俗関連の事例報告、各自が関心を持った事項の論文紹介などを課す。これらの資料を通じて、絵図や地形図、景観写真を読む視点を学ぶとともに、地理学、民俗学、その他関連分野の論文読解を進めることで、地域文化と景観コースで研究を進める上での研究方法を身につけていただきたい。	

授業内容（史学基礎演習Ⅱ）

日本史学・古代史	清武雄二
日本史研究の基本史料の一つである『延喜式』を対象として、古代史料を読み解する上での基礎的な方法論を学んでいく。『延喜式』は古代国家の行政や儀式に携わる官人の業務マニュアル的な施行細則集であり、その内容は諸国の物産や生産技術といった諸分野に及ぶ。このため、歴史学にとどまらない広範な学問分野から注目されているが、膨大な分量と法制史料・編纂史料としての難解さから、その活用には一定の基礎知識と方法論が必要となる。本演習では、諸写本・版本による校訂といった古代文献史料の基礎的な取扱い方を実践的に学ぶとともに、諸制度や儀式、物品の生産・貢納といった多角的な視点を切り口として『延喜式』を読み解いていくことで、史料が内包する豊かな情報を適切に引き出して活用する「読み解き力」を培っていきたい。	

日本史学・古代史	佐藤長門
この演習は、日本史研究をこころざす学生を対象として、基礎知識の習得をおこなうとともに、歴史を学ぶうえでの方法論を身につけることを目的とします。授業の前半においては、日本古代史に関する史料を紹介し、それを履修者とともに輪読していきます。また後半においては、吉川弘文館の「歴史文化ライブラリー」から1冊を選択し、その内容を紹介するとともに、その他の専門論文や著書を併読して、見解を批判してもらいます。大学における「歴史学」はただ暗記するものではなく、さまざまな見解を通覧して自分の考えを打ち出す必要があります。そのための史料講読と論文学習の初步を「体験」してもらうつもりなので、積極的に履修してください。なお授業には、必ず漢和辞典（出版社は問わない、電子辞書でも可）を持参してください。	

日本史学・中世史	高橋秀樹
近年の平安時代～戦国時代の歴史研究にとって、古記録と呼ばれる漢文日記を史料として用いることは不可欠となっている。しかし、古記録を使いこなすためには、文体や用語法についての基礎的な訓練と慣れ、貴族社会についてのある程度の知識が必要である。そこで、この授業では、古記録の基礎知識を身につけるとともに、漢文日記を原史料とする編纂物である『百練抄（百鍊抄）』の輪読を通じて、変体漢文（和風漢文体）の読み方、語句や内容の調べ方についての基本を学ぶ。	

日本史学・中世史	矢部健太郎
当演習では、戦国織豊期に時期を限定して史料読解の演習を行う。対象とする素材は、主に武家社会においてやり取りされた古文書とする予定である。ただし、中世社会の復元のためには、多種多様な史料に関する理解が必要である。よって、公家衆や寺社が書き残した古記録などの史料の扱い方に関しても、十分に時間を割いて取り組んでいきたい。	

日本史学・近世史	吉岡 孝
江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特的の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。	

日本史学・近世史	野本禎司
江戸時代はそれ以前にくらべて、飛躍的に古文書が作成された時期である。そのため江戸時代を研究する上では史料に対する広い理解が必要になる。江戸時代が終了して150年以上が経過し、史料に出てくる単語・用語・文体は現代人にはなじみが薄いものになっている。まずこれに慣れる必要がある。また江戸時代の史料はくずし字と呼ばれる独特的の書体で書かれている。翻刻されている史料は少なく、この読解も必要である。	

日本史学・近現代史	柴田紳一
本学図書館には寄贈・購入などによって収められたさまざまな貴重書(書籍や史資料など)が多数所蔵されている。その中には日本近代史に関わる重要なものが多数含まれている。身近にありながら日頃なかなか学生が目にすることのできないものがほとんどである。この演習では、①〈授業の進め方〉史料を読み進めながら報告を求め、②〈授業で重視するポイント〉史料を読む力や、文章作成・発表など表現する力を身につけることを基本にし、③〈学びのポイント〉徐々にステップアップしながら(毎回出席し回を重ねる中で)考え・調べ・読み・表現する、その進行・反復の中で学生には積極的な姿勢で授業に臨み、着実に「歴史を学ぶ力」を体得してもらいたい。	

日本史学・近現代史	手塚 雄太
<p>日本近現代史の史料は膨大かつ多種多様だが、そのなかでも当事者の行動記録である日記は極めて重要な史料である。とはいえ、日記を読みこなすためには、その他の史料の読解や同時代への理解が必要不可欠となる。本演習では、日記の内容を詳しく調べた上で、他の参加者が理解できる形で発表してもらうことを通じて、日本近現代史の研究方法を学ぶ。</p> <p>受講者は、こちらが指定した史料について、その内容・背景などを調べて報告する。この演習では、戦前日本を代表する政治家の一人である原敬（1856–1921）が残した『原敬日記』を中心的に扱うことで、「平民宰相」と呼ばれた原の実像、そして同時代の状況に迫りたい。なお、史料は報告終了後、全員で音読するので、予習は不可欠である。</p> <p>史料報告を通じて、近現代史研究の基礎を学ぶとともに、3年生からの卒業論文に関わる演習を選択するための判断材料の一助として欲しい。</p>	

外国史学・東洋史	江川式部
<p>本演習は、前近代の中国を中心とした東アジアの歴史研究を志す方を対象とし、中国史の史料及びそれに関連する概説・論文を読み、史実の読み解き方を学習していきます。まず各種の研究入門書を紹介・参照しながら、研究テーマの選定方法・先行研究のリストアップ・どのような史料を用いるのか、どのように読み解くのかなど、歴史研究の基本的な方法について学びます。授業の前半では実際に中国唐代長安の寺院記である『寺塔記』や、仏僧の伝記である『続高僧伝』などを読みながら、当時の仏寺と仏僧の諸相、また朝廷や諸外国との関係などを広く眺めてみたいと思います。信仰のよりどころとしてだけではない仏寺の様子を読み解きながら、当時の宗教をめぐる社会の様子について考えてみましょう。またこれとあわせて各人個別に設定したテーマで研究をすすめ、授業後半で研究発表をしていただきます。今回は「前近代東アジアの宗教と社会」を大テーマいたします。</p>	

外国史学・東洋史	樋口秀実
<p>この演習は、中国・朝鮮古代史を除いたアジア史の諸問題について勉強しようという学生を対象とします。授業内容としては、①論文講読、②研究報告、③レポート執筆の3つを行ないます。①は、アジア諸国・諸地域の歴史に関する学術論文を読みます。「東洋史」というと「中国史」を連想しがちですが、この演習では、日中朝三地域を中心とする「漢字文化圏」に属さない、アジアの「横文字文化圏」の歴史に関する論文も読みます。②は、アジアの王朝や国家に関する報告をしてもらいます。③は、論文分析や報告内容に関わるレポートを数回書いてもらいます。①～③の作業を通じて、テーマを設定する、調査・分析を行なう、結論を導きだすといった論文執筆のために必要となる技術を身につけてください。なお、この授業は、皆さんの報告を中心に進められ、教員である私は、皆さんのアドバイザーとして脇役に徹します。授業のなかでいちばん大事すべき要素は、自分の感性にもとづき、自分の意見を自分の言葉で述べることです。うるさいくらいでかまわないので、積極的に授業に参加し、どんどん発言をしてください。</p>	

外国史学・西洋史 (西洋近世・近代史)	新任教員
<p>本演習は、西欧（イベリア半島やイタリアを含む）および南北アメリカの近世史・近代史（16～19世紀）について学びたい学生を対象とし、西洋史の基礎ならびに研究の基礎を習得することを目指す。そのために、受講者には計2回以上の発表を行なってもらう（1回目：関心あるテーマについて、2回目：そのテーマに関する先行研究のレビュー）。そして毎発表後に、全員参加のディスカッションをする。なお、この基礎演習では外国語文献講読の訓練は行わないで、別途「外書講読1・2」を履修することを推奨する。</p>	

外国史学・西洋史 (西洋近代・現代史)	神長英輔
<p>この演習は、中東欧、北欧、中央ユーラシアを含む旧ソ連地域の近現代史研究を志す方を対象とし、自分が関心を持つ時代や地域の研究史と発展的な研究方法を学ぶこと、特に適切な先行研究に拠って適切な問い合わせ立てることを授業の主な目的とします。受講者には、西洋史を主題とした指定様式での研究報告（1人あたり2回以上）と毎回の授業での発言を義務とします。各回の報告では先行研究を踏まえて自分で問い合わせ立て、必要な研究の方法と史料について考察してください。なお、西洋史の研究を志す方には2年次開講の外書講読Ⅰ・Ⅱの履修を勧めます。</p>	

考古学	谷口 康浩
この授業では、縄文人の残した伊闕・遺物を通して縄文文化への理解を深めるとともに、考古学の資料の見方や研究法を学びます。『入門 縄文時代の考古学』(2019年、同成社)を教科書に使用し、本書全章の講読・解説を通して縄文時代の考古学を基礎から学んでいきます。教科書の目次を参考に示します。序章：縄文への関心、第1章：縄文時代の枠組み、第2章：進歩する研究法、第3章：縄文時代の日本列島と生態系、第4章：縄文人の生態、第5章：縄文人の技術力、第6章：縄文時代の社会、第7章：縄文人の心と世界観、第8章：縄文文化の終末、終章：縄文時代史と歴史観 また、導入として本学博物館に展示されたさまざまな縄文時代遺物を見学し、それらの資料から何を知ることができるのかを考えます。	

考古学	深澤 太郎
考古資料（遺跡・遺物）は、一体どのような目的で作られ、どのように使われたのでしょうか。その意図を解明する糸口は、遺構の様態や、遺物の精緻な観察から窺い知ることができます。そこで当演習では、主に弥生時代・古墳時代の遺跡・遺物を取り上げて、考古資料の意義を明らかにするための研究方法について考えていきます。具体的には、①機能論に関する講義を行った上で、②典型的な論文を講読して考古学者の思考法を理解していきます。その上で、③受講者にテーマを与えて演習発表を行う手順で進めていく予定です。当時の生活道具や、生活・政治・葬送・祭祀の場などを取り扱う予定ですが、初回授業時にアンケートを実施しますので、受講者の関心によっては、古代・中世・近世の事例についても触れていく予定です。	

地域文化と景観	赤松 加寿江
本演習はイタリア・トスカーナ地域の都市景観と農村景観を読み取る方法を身につけていきます。トスカーナ地域には、古代ローマに起源を持つフィレンツェや中世以来の小さな城塞集落が残されています。農村地域では古くからぶどう畑やオリーブ畑が耕作され、固有の土地利用と景観が作られてきました。どのようにしてこれらの景観が形成され、残ってきたのか。古地図、旅行記、日記、国勢調査などの史料やWebGISを活用することで、景観の特質と変化を理解していくと同時に、建築図面および建築そのものも史料であることを知り、建築を読み取る力をつけていきます。文献検索の方法、論文の読み方、地図・絵図・景観の読解方法、レジュメの作成方法、口頭発表のやり方を学習したのち、それぞれ地域とテーマを選び、各自発表を行ってもらいます。本演習を通して、「地域文化と景観コース」の学習と研究に必要なスキルを身につけていきます。	

地域文化と景観	川名 祢
<p>『利根川図志』は、医師・赤松宗旦が著した江戸時代の地誌書です。本書は、越後魚沼の雪国の生活を描いた鈴木牧之の『北越雪譜』とも比較されることが多く、当時主流であった一国ごとの地誌とは異なり、利根川という自然環境を中心に、その流域の歴史・文化・民俗等を描写したところに特徴があります。また本書は、利根川を媒介として地域と地域とが結ばれ、あたかも「地中海世界」ならぬ「利根川世界」(利根川文化圏)が形成されていたことを窺わせるものもあります。さらに挿絵には多くの著名な絵師たちが参加しています。</p> <p>この演習では、地図や絵図などを使用しながら、『利根川図志』をテキストとして、受講生はそれぞれにテーマを選び、それに基づいた発表を行います。そのための文献検索の方法、論文の読み方、地図・絵図・景観の読解方法、レジュメの作成方法、口頭発表のやり方等について事前に指導を行います。本演習を通じて、「地域文化と景観コース」の学習と研究に必要なスキルを養います。</p>	